

私にとって、ケニアでの1週間は、たくさんの気づきと学びの場となりました。話す言葉も、肌の色も、文化も、日本とは全然違う場所に1人で飛び込んでいくのは、とても不安でしたが、自分の足で一歩踏み出すことが今の自分には必要だと思い、ケニアに行くことを決めました。

エルドレットに到着した日、オフィスに着く直前に停電しました。ランプの明かりだけでご飯を食べるのは初めてで、ましてヤギの肉をナイフで削いで食べたことなどあるはずもなく、初日から衝撃と戸惑いの連続でした。でも、村の明かりがすべてなくなったことで見ることでできた満天の星空は、今までに見たことのない数と美しさで忘れることができません。

2日目には、あるグループの活動を見学させていただいたのですが、緊張からグループの人とあまり話すことができずに1日が終わってしまいました。グループの中には、話しかけてくれる人が何人もいました。私自身も現地の人と話したいことや聞きたいことがたくさんあったのに、英語を話すことも聞き取ることもほとんどできず、また、それを理由に積極的にコミュニケーションを取ろうとしなかった自分が、悔しくて恥ずかしくてたまらなかったです。3日目からはホームステイもあるし、ここでくよくよしてはいられないと、日本を出発する前に、たまたまCMで流れていた曲の歌詞を思い出しました。「きっと世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔なんだ」。

3日目、カゾキグループの活動場所に向かう道中で町や村の様子を見てみると、木陰で休んでいる人がいたり、牛や鶏が道のすぐ横を歩いていたり、自由にゆっくりした空気が流れていて、私も今はこの空気の一員なのだとマイペースで頑張る覚悟ができました。活動場所に着いてしばらくすると、「じゃ、がんばってね」と喜田さんたちは去ってしまいましたが、とてもフレンドリーなグループの人たちは、さっそくあっちへこっちへ連れて行ってくれました。いろんなものを見せてくれたり食べさせてくれたりして、会話はスムーズにできませんでしたが、お互いに伝えようと理解しようとしているのが分かり、ポレポレコミュニケーションを取れるようになりました。

道(橋)作りでは、動きたいときに動いて、休みたいときには休む、という無理せず自分たちのペースで活動している様子が、いつもアルバイトで時間に追われている私にとってとても不思議な感覚でした。でも、そのペースを咎める人は誰もおらず、全員が自分のペースを保っていられる姿から、日本とは違う国民性を感じました。

ホームステイでは、水道も電気もない環境で4日間過ごしました。いつもは蛇口をひねれば出てくる水やお湯はなく、薪で火を焚いてお湯を沸かし、お風呂は盥に1杯のぬるま湯、飲む水はミネラルウォーターのみで、限られた水をどう使うのかとても悩みました。夜はランプの光のみで過ごし、外では月明かりを頼りに移動し、不便ではありましたが、家族が一か所に集まっている様子が温かくて、その場に自分も一緒にいれることが嬉しかったです。ママと出かけるときは、バナナをお供に出発し、どこに行って

も熱いチャイがふるまわれました。何でこんな熱い場所で常に飲み物が熱い熱いチャイなんだとずっと思っていたいますが、今となってはママが淹れてくれたチャイが恋しいです。

今回ケニアに行ったことで、発展途上国に対する考え方や見方が以前とはガラッと変わりました。華やかな市場の裏のゴミの山や、エルドの街で私の髪を引っ張ってきた子どもの目、一方で高層ビルの立ち並ぶナイロビの街、そのどれもが頭から離れません。国際協力是人から始まる、という喜田さんの言葉が頭に残っています。今後、国際協力にかかわっていく中で、金銭や物資の提供の前に、思いやり・心づくしを忘れずに取り組んでいきたいです。

日本に帰ってしばらく経ち、ケニアにいたことが夢であったかのように感じます。しかし、今も体に残るノミに刺された痒みと痕が私のケニア旅を証明しています。

道普請人のみなさま、COREオフィスの喜田さん、松本さん、本当にありがとうございました。